

鳥語 54

2007

詩 評論 小説



鳥語社

鳥 54 語

2007年5月15日

目次

詩

雪

大阪まで

三浦玲子 2

小説

龍馬の写真

中尾哲也 8

鬼安

生田幸平 35

流星の人

純永慎之輔 42

虚痕

東築史樹 70

春の泊 (はるのとまり)

岩田孝子 86

エッセイ

シルクロード雑感

木下蘭子 116

日本の古代の人々

藤原正雄 126

同人・会員住所録

編集後記

130 7

流星の人

純永慎之輔

あの人がやって来たのは、明治二年（一八六九年）四月二十日のことでした。

私はその人が船で木古内の戦場から箱館病院に運ばれるとき、港で出迎えました。そのときが、あの高名な伊庭八郎さんとの出会いとなりました。

伊庭さんは負傷していました。

肩から腹にかけ、銃弾を受けたような傷が三力所にありました。戸板に乘せられ、衣類には血糊がべったりとついていたのを覚えています。

伊庭さんは箱根・山崎の戦いのあと、「肩腕の美丈夫奮戦」と江戸っ子の人気を独り占めにしたような人でしたから、再起不能といわれるほどの重傷を負っていても、神色自若としておりました。

「おや、お前さんは誰だったけな」

出迎えた私に伊庭さんはそういいました。肩で息をしているのが気になりました。

「田村です。新選組の田村銀之助です」

と、こたえると、

「田村……」

つぶやいて少し目を閉じました。

私は二度と目を開かぬのではないか、と安じ、

「また、やられましたね」

生意気なことをいったものです。

前年の五月、官軍を箱根の嶮に封じ込めようと迎え討った伊庭さんら遊撃隊は、湯元三枚橋付近で小田原藩兵との激戦に及びました。そのとき、伊庭さんは左腕を斬り落されたので、親しい気持ちで込めて、そんなことを口走ってしまつたのです。思い出すだけでも冷や汗ものですが、私もあのときは若かった。けれども、伊庭さんは私以上の若さを保っていたようです。目を開くと、にこりとして、

「なあに、この腕が利くから五稜郭に戻ってきたのさ」

右腕を私の胸の前に突き出してみせました。負傷者は伊庭さんを含め二十数人。彼らは病院が用意した担架に乗せられ、弥生坂を上り舟見町の病舎まで運ばれました。四月下旬とはいえ、蝦夷地の春は遠い。今にも雪が降りだしそんな天気でした。

病院で治療の後、伊庭さんは「土方さんは元気か」といいました。

「副長は二股の陣地で官軍を釘付けにしている、ときいています」

私は知っている限りの情報を伝えました。このとき、土方さんは五稜郭政府の「陸軍奉行並」という閣僚でしたが、

私たち新選組の隊士にとつては「副長」のままでした。

「土方さんに初めて会つたのは、大坂の事件があつた翌年だつたような」

「大坂の事件、とは一体何ですか？」

私は病院のベッドに横たわる伊庭さんに、しつこく質問していったようです。

——元治元年（一八六四年）、大坂。

八郎は、組頭の忠内次郎三のいつけで金子四両を用立てに大坂市中を歩いていました。將軍警護で上方に宿借りした後処理のため、組頭に随つて奔走していた。八郎が宿舎のある谷町筋まで戻ろうしたとき、昼間から泣きだしそうだった空が、こらえきれずに雨露を落とし始めた。

（とうとう降り出しやがつた）

八郎が苦々しい顔つきで考えていると、金子を用立ててくれた筒井という男が、

「伊庭さん、この傘持つていきなはれ」

黒い蛇腹を差し出した。

八郎は「かたじけない」と丁重に頭を下げ、蛇腹を広げるとぬかるむ道へぬけた。五月も中旬を過ぎたというのに肌を感じる風は冷たかった。筋の両脇に立つ銀杏並木が強風でこうこうと揺れている。陽も暮れようかという刻時。足下がすでに見えにくくなっていた。

（腹あ、へったなあ）

早い時間に昼食を採ったきり、何も口にしていない。何か暖かい食でも……、と思つていたところ、四天王寺の門前に「鍋焼きうどん」の暖簾を見つけた。

（これあ幸い）

とばかり、屋台のおやじにうどんを注文した。根っからの江戸っ子である八郎などはそう思つていたが、西方から人々が流入した江戸期前半のころはうどんが江戸でも主流だった。おやじが出したうどんはいかにも温たまりそうな一品だった。鍋は今戸焼きの赤い鍋、色の薄い汁のなかに鳴戸かまぼこが入り青味を効かしてある。八郎は一目し、ゴクリ、と唾を飲んだ。

屋台の前には八郎のほかにも商人らしき男が二人。

うどんを食っている八郎の横で話し始めた。

「昨日な、京に用でいつてきたんやけど四条の御旅所妙見宮の傍らに例の張紙がありましてな」

例のとはいつたい何だろう。

「内山様も難儀なことやつたな」

連れの男がいった。

八郎は、この日より四日前に起こつた事件を知らなかった。

「率爾ながら」

八郎は傍らの商人らに頭を下げた。

「食事の最中で申し訳ないことだが、今の話し少し詳しく教えてもらえませんか？」

「あんさんは？」

「申し遅れましたが、私は江戸の伊庭八郎です。所用があつて大坂に在しています」

店の屋号が入つたはん纏を羽織つている男どもは警戒の色を解かなかつた。大坂でもここ二、三年の天誅騒ぎで物騒になつてゐる。正体の知れぬ二本差にいきなり話しかけられて、ぎくつ、としない者はいなかつた。

「今の、と申しますと、内山様のことですかいな」

「そうです」

「あんさん、本當に知らんのですか？」

なお男どもは及び腰である。話しの内容次第では、抜き打ちにバサリとやられかねない。けれども、さつぱりとした羽織、袴姿のこの若者は質問しながらにこにこしてゐた。役者のようだ、といわれた八郎の、その端正な顔立ちに愛嬌が加わると、道行く誰もが八郎に視線をなげたといいう。その表情で男どもは安心したらしく、警戒を解き始めた。

「大坂町奉行所与力の内山彦次郎様が殺されましたんや」

「いつです？」

「二十日ですわ。天神橋の上で」

（幕臣ではないか）

八郎の笑顔が消えた。

「例の、とは何です」

「張紙ですがな。二十一日に天神橋の上で、そしてきうは京ですわ」

「何と書いてありました」

「それは……」と京で用をしてきたという男が意識した。

この者、累年から贅沢三昧し、かつ不法の換言をもつて市民を惑わし、賄賂をもらい、これをもつて政道をゆがめ、さらに昨年から、私欲に任せて諸物の物価を釣り上げた者なり。万人に苦しみを与えたことよって、昨日二十日夜、天神橋にて天誅を加えたところである。(以下省略)

天下義士

「それで下手人は？」

「わかりまへん。それでも浪人風の侍が数人、悠々と橋を下っていったらしいですわ」

(浮浪の仕業か?)

八郎はうどの汁をすすつ、と啜る。

「ところで、殺された内山という与力は本当に張紙にあったような男なんですか？」

「それはどうなんやろう。ただ、やり手の与力だったことは確かなようですわ」

目立つほどの仕事人でなければ浮浪ごときに付け狙われることもあるまい、と八郎は思った。内山は若きころから有能、優烈の呼び声が高く、天保八年の大塩平八郎の乱のときは自ら逮捕に活躍したという。陽明学者としても高名であった。

「そういえば」

もう一人の男が口を開いた。

「去年の八月にも難波橋の高札場に内山様に天誅を加える、という張り紙がありましたんや。まあ、いま思えばこの騒ぎもそこから始まったんと違いますやろか」

「その張り紙には何と？」

「要するに、ここ最近、干鰯の値が上がっているのは係り役人の内山様が不正に操作してつりあげているのだ、という内容だったように思います。それ以前にも安政の初めのころやったか、綿や菜種の売買で近郷の商人らと係争していたこともあり、標的になったんと違いますやろか」

「つまりは商人らの恨みを買ったと？」

「そうは言い切れまへん。内山様を良使とあがめる人も大勢いますし、反対に私らの仲間には『御用金』と称して御公儀に納める金を頻繁に町方から絞り取るので毛嫌いな者も少なくない」

話しながら、このはん纏姿の男どもは、

(よう質問するやつや。よほど話し好きなのやつやな)

と感じていた。ひよつとすると公儀の役人かも、などと想像したりしたが、まさか將軍の親衛隊士とは夢にも思わない。八郎との会話に引き込まれ、つつい話しが幕府や將軍家茂への愚痴になった。

「そんなもなあ、お武家はん。わしらもここ数年は本當に窮してまんねん。物の値は上がり、品物は売れん。苦しい台所のうえに、この天誅騒ぎや。奉行所は何も手を打たないし、というか力がないんやねもう」

八郎は伏せていた目をきつ、と上げた。遠くに見える四天王寺の赤い堀塀が暗闇のなかで、妙に鮮やかに見えた。

「將軍さまがお城に居ましたやろ」

（そうだ）

誰よりも八郎がよく知っている。

「それでも居るだけなんやな。町方の様子を知ろうともしない。大坂城といえ、太閤秀吉公以来、わたしら民衆が仰ぎ見るところでつせ。なにもできない、使えん男をいつたい誰が信用しますかいな。結局は自分の身は我自らが守らぬとならん」

男はうどんな汁でもからんだのか、ぺつ、と唾を吐き捨てた。無礼討されるかもしれぬという覚悟のうえだ。天下を動かしているのはわしらのぜにや、侍やあらへん、と腹の底からそう思っている連中だ。せりふの一つひとつに肝がすわっていた。

（こいつ、武士の前でよく啖呵を切った）

八郎はその剛直さに感心した。

「まいど、おおきに」

屋台のおやじに金を払うと、八郎ははん纏姿の男どもに礼をいって、その場を辞した。

結局、内山事件は誰が下手人で、殺された本當の理由もよく分からなかった。八郎が実情を知ったのは、この年の夏、江戸に帰ってからのことである。

下手人は新選組であつた。

八郎は江戸に帰府する前、京・三条小橋の池田屋で浪士取り締まりがあつたため、後詰めとして急ぎよ、京都所司代支配下に入り待機したことがあつた。このとき、浪士を鎮圧したのが、京では「壬生浪」とあだ名されていた新選組だつた。

（ああ、あの新選組か）

内山暗殺の実情を八郎に語つた古参の幕臣は吐き捨てるようにいった。

「暗殺の前年、大坂の鍋島浜のあたりで新選組の隊士が大坂相撲の力士を斬つた事件があつたじゃないか。その処理で内山が近藤を取り調べたらしい」

八郎は耳をそばだてている。

「そのとき、われらは町方の詰問を受ける身分ではござらん、たつて聞きたくば会津中将へ照会されたらよろしかろ

う、と近藤がつっぱねたそう。どうだい、武州多摩の百姓が武士づらしやがつて」

池田屋の取り締まり後、京で活躍する新選組の評判はあがる一方だったが、江戸に在する古格の旗本らには、苦虫を噛み殺しているこの手の否定派が多かった。

「事件は近藤の私怨からに違いない」

天神橋のたもとに潜んでいたのは、局長の近藤勇のほか沖田総司、原田左之助、永倉新八、井上源三郎の五人だったらしい。内山が番所を出た夜四つ下り（午後十時すぎ）、人通りの絶えた橋端で抜刀して待っていると、内山の乗った駕籠がやってきた。内山も物騒な世相のおり、腕の立つ剣客を一人駕籠に付き添わせていた。橋にさしかかるや沖田と原田が駕籠の右側から、左からは永倉と井上が襲った。その姿を見た駕籠と護衛の剣客は駕籠をどすりと下に落とす逃げた。その後、沖田が駕籠に一刀をくれた後、重傷の内山をひきずり出して首を刎ねたという。

「だが、彼らの剣で京はおさまっている、ともいえる……」

「おやおや、伊庭家の跡継ぎが驚くようなことをいいなさる。心形刀流はれっきとした公儀の剣流だし、御家も先祖代々の家柄ではないか。新選組の連中を認めるような発言は、伊庭家に対する公儀の恩を裏切ることにならないか」

（それもそうか）

一理ある、と八郎は思った――

二

私が隊に入ったのは慶応三年（一八六七年）秋のことです。私は奥州磐城平の産ですが、そのころ、京にいる慶喜公が大政を奉還したという報は遠くこの地にも届いていたと記憶しています。十三歳でした。

私は少年の身ながら、この先自分の身の回りはどうなるのだらうと不安でした。老いた両親や幼い兄弟の身の上に降りかかる不幸。それを考えただけでも暗澹とした気持ちになったものです。

なにしろ、自分がその短い生涯のなかで立脚してきた土壌が、うねりのなかで大音響とともに流れ出したのです。信じられないことでした。黙って座して、流れに身をまかすというのも、生き長らえるひとつの方法だったのかもしれない。でも私はそれが出来なかった。若さとか血気とかそういうものではありません。じつと一人で構えていることが恐くてしょうがなかった。何か動いていなければ恐怖心に押し潰されそう、そんな気持ち支えられていました。

新選組は「江戸に帰府する慶喜公を護衛する」という役目を掲げ、広く隊士を募集していました。私は入隊を決意しました。

「そんな話はおれにもあつたなあ」

伊庭さんが箱館病院に入院して十日ほど過ぎようとしていました。ベツトの上からよく窓を眺めていました。視線の先には春の弱い太陽が、きらきらと箱館湾の青い水面に光を反射させていました。

「田村君は、慶喜公が好きか？」

伊庭さんはそう訊きました。

「好きとか、嫌いとかじゃなくて奉公仕ることが武士のつとめと思っています」

「そうじゃねえと思うんだ。今度のいくさをよく見てもらんよ。彦根など譜代どころか御三家までも薩長の連中になびきやがった。君のいう武士のつとめがあるならこうはいかねえ」

伊庭さんら遊撃隊が箱根の嶮を後ろ楯に官軍と闘ったとき、その大義は彦根、尾張、紀伊三藩の罪を問う、ということだ、と松前奉行を務める人見勝太郎さんに聞いたことがあります。

「おれはね、京にいたころ、前の上様にとてもよくしてもらつたんだ」

「家茂公ですか」

「そうさ、あの方に接して、ただの一度で惚れちまつた。

男が惚れるいい男さ。それからあの方のために働くことと決めたんだ」

徳川家は慶喜公の隠棲後、田安亀之助様が相統し、旧幕臣の方々といつしよに駿府へお移りになられました。

官軍との激戦は続いていました。木古内の陣が陥ちた後、旧幕軍の陣は土方さんが守備する二股以外は攻め込まれて、縮小されつつありました。そして四月二十九日、官軍の艦砲射撃で矢不來の陣が陥ち、伊庭さんが隊長の遊撃隊は一軒屋まで後退しました。伊庭さんの戦況のことは伝えていませんでした。体や精神面に配慮した院長の方針だったからです。

私は窓の方へ小首を傾げている伊庭さんの顔を覗き込んでみました。体力は次第に回復しているように見えました。が、体に残った弾丸はまだ抜いてません。ときおり傷が痛むのか体が小刻みに震え、歯をぐつとくいしばる表情のときもありました。しばらくすると、寝息がきこえてきました。その寝顔からは安心してゐるようにも、昔を懐かしんでいるようにも感じられました。

—京都。八郎はこの日、父の軍兵衛から「どうだ、わしに一日付き合わぬか」と誘いを受けた。朝から抜けるような青空が広がっている。八郎は朝五ツ（午前八時ごろ）、軍兵衛の宿舎をたずねた。八郎は仙台袴に鼠帽の大小、軍兵衛も同じ出で立ちで、まず、松原通の大丸呉服店に行き、その後、四条通を祇園社まで買い物に歩いた。

「八郎殿、きようは当番だったの」

「はい。七ツ（午後四時ごろ）にはお城に入らなければなりません」

「なあに長居させぬ。心配は無用だ」

ひととおり買ひ物が済むと、軍兵衛は八郎を気遣つた。どこかで昼めしでもどうか、と探しつつ河原町三条のある店に入つた。狭い店の奥隅で軍兵衛は壁を背にしていた。格子窓から差し込む光が八郎の手もとを照らし、軍兵衛の居場所を日陰にした。質問する軍兵衛の表情は八郎の側から見えにくかつた。

「勤めはどうだ？」

將軍の護衛として二条城の公務は四日に一度登城し、徹夜の警戒に当たる。そして明けた翌日は非番だ。その日は同僚と京の名所を散策する。八郎の毎日はそのように時間が費やされていた。

「玉座近くの廊下が受け持ちです」

「忠内次三郎殿の組下に属したと聞いている。忠内殿はわが道場の門下で、講武所でも剣術教授方を務めていらつしやる方だ」

「存じております」

「先日、忠内殿にお目にかかったが、八郎殿は本当に稽古熱心じゃ。稽古することに腕が上がつていくのが手に取るように分かる、と言つておられた」

「恐れいます」

八郎は照れたのか、微笑しながら少し顔を伏せた。

「ところで、いよいよ明後日じゃの」

「上様の上覧試合のことですか」

「そうだ。八郎殿は上覧試合は初めてじゃが、気後れはしていいまいの？」

「気後れはしていませんが、何かこう実感がわかないのです」

「なあに、心配することはない、立ち会いで竹刀の音を一度でも聞けば、そこから緊張感がみなぎるものさ」

（そんなもんかなあ）

八郎がそう思っている傍らから、店の女中が焼き魚とものを運んできた。

軍兵衛は口に出してこそ言わぬが、八郎に「心形刀流の後とり」として、その名に恥じぬ試合を望んでいた。伊庭家に伝わる心形刀流は江戸初期から百五十年近く流派で、父の軍兵衛が九代目である。だが、この父は実父ではない。この流派には「一子不伝」という約束事がある。

「実子でなくても、門人に優れた者がいれば、それを選んで後継者とせよ」

養父、軍兵衛秀俊は八郎の実父である先代の軍兵衛秀業（伊庭家では流派を継ぐと代々「軍兵衛」を名のつた）の門人で八郎とは血のつながりがない。秀業が隠居後にコレラで死ぬと、十五歳の八郎をすぐ養子にし、ゆくゆくは十

代目として伊庭家に恩を返そうと思つていたらしい。

秀俊は安政三年から幕府が武道振興の目的で置いた講武所に剣術教授方として出仕していたが、このころから手取り足とり八郎に剣術を教えていた。要するに八郎の腕前は軍兵衛秀俊がその基礎を成した。この養父が上覧試合で八郎以上に氣を揉んでいるのも、父親としての心情に加え、師匠として伊庭家十代目の真価も問われると考えているからだった。

八郎も十分にそれを感じていたが、試合そのものが曇を纏むような氣がしていた。

(おれは上様の顔をしらぬ)

徹夜で將軍の身辺を守る、という役目とはいえ、八郎の身分は部屋住だった。市井の部屋住みと「天下人」の隔たりたるや、想像できぬほどに大きい。

(いくら先祖代々の直参伊庭家の後継とはいえ、書生のまじや天下の征夷大將軍も会つてはくれまいよ)

そう思う。父は「奥詰」といういわば將軍親衛隊と呼ぶべき職に就いている。今回の上洛も父があればこそのことであり、心形刀流十代目となるべき者と見込んでの抜擢であつた。そのことは分かつているが、何事も実際に目で見えて肌で感じるのが好きなこの若者にとって、上覧試合の重大さまではどうも想像が働かない。

試合の日、八郎を含めて五十人は將軍家茂の着座に際し

て拝謁が許された。参加の者はみな平伏した。直接、將軍を仰ぎ見ることはできない。八郎は上目遣いで何とかその素顔を見ようと必死になつた。

(こんなに若いのか)

声をあげんばかりに驚いた。まだ幼顔ではないか。若いとは聴いていたが、おれとさほど歳はかわらぬらしい、と思つた。この十四代將軍の立場は理解しているつもりでいる。この時期より六年前の安政五年、十三歳で將軍職を継いでからは、

「攘夷をかさにした長州の謀略だけじゃない。諸外国やお上との折衝にも心を勞されていると聞く」

何度も父から聞かされていた。上様はな、と軍兵衛は八郎にいう。

「御身周辺の人を大切にする方らしい。ある日、上様の習字の師が御前で尿を瀧らした。師もきつと体調が悪かつたのだらう。上様もそれに氣付いた。このことが周囲にばれると、師は改易かもしくは切腹にもなりかねん。上様は一計を案じなされ、机の上にあつた水を師の白髪頭にザツ、とかけて笑つたそうだ」

「罰を与えられたのですね」

「まあまあ、話は最後まで聞くものじゃ。水をかけたとき、その場に居合わせた老臣らは、なんという悪戯を、と諫めたそうだが、後日、この水をかけられた当の師が涙ながら

に上様に感謝していただきたい」

(そういう方なのだ)

家茂その人を、自分の目で確かめた八郎に不思議な親近感が生まれていた。

試合の模様を八郎の日記から拾うと、

少子義は大内志津魔と試合、二度目二沢隼之助殿と試合

大内は幕臣で二年後、八郎とともに遊撃隊に入隊。沢は講武所で剣術世話心得という役に就いている。八郎は間合いをはかりながら「うむ」と右足を踏み込む。心形刀流の得意技は「突き」で八郎のそれは後年、幕末の随一の剣客と評された山岡鉄太郎(のち鉄舟、維新後は明治帝の侍従など勤め、明治二十一年没)が立ち会ったとき、

「おれの突きははずされ、あやうく伊庭の突きをもらいそうになったよ。あの突きをはずすには工夫がいった」

と懐述するほど鋭い。八郎は大内ら二人とさんさん打ち合った。兩人とも幕府内で名が知れる使い手で容易に決着はつかず、試合は時間を経ることに激しさを増した。

その間、將軍家茂は微動だにせず、じつと最後まで試合を見つめていた。八郎は後日、その様子を人伝に聞いた。あの若き殿様の容姿と重ね合わせた。

(誠実さが、あの試合での姿勢に現れているようだ)

感動は続く。この試合で家茂は自らの下緒と子菊紙、扇子を八郎に与えた。家茂はこの上覧試合がよほど気に入ったらしく、この翌年の慶応元年に再度西上したとき、大坂城内の玉造に臨時講武所というべき道場まで新設して稽古を奨励した。八郎が密かに、上様はおれが守り抜く、という決意を抱くようになったのは上覧試合の後からだった。

(あの若さで真摯に天下と向き合い、逃げずに立ち向かっている)

若者のな同情心が八郎の胸を熱くした。

試合は夕刻に終わった。城の西に傾く夕日を眺めていると当たり前の一日が過ぎていくようで、自分の主人が上洛までして心を悩ましている世情の騒乱がうそのように思えてくる。

(御公儀は絶対に大丈夫さ)

八郎はそう信じて疑わない。誰もが、いま立脚している大地こそ万全とおもう。それが突然消滅してしまうなどとは考えられぬし、考えたくもないことだった――

三

「こう何もしねえで、寝ているだけじゃ気が滅いるねえ。酒でも飲みたいものさ」

伊庭さんは時折、私の顔を眺めてはこんなことをいった

りました。傷はだいぶ良くなり、体力も回復しているようでした。

「お酒は傷が膿むからいけない、と凌雲先生にいわれていまから」

私は必死に伊庭さんをなだめました。伊庭さんの思いは痛いほどよく分かるからです。この時期、遊撃隊は旧幕軍の先鋒として官軍が陣を張る七重浜を夜襲していました。襲撃陣には我らが新選組や彰義隊、伝習歩兵隊なども参加し、勝利の報を箱館病院にまで知らせてくれました。

「昨日なんぞ、官軍の連中は戦わずして逃げたそうじゃないか。小銃や弾薬なども分捕ることができたらしい」

伊庭さんは上機嫌でした。それで祝杯をとという気分らしいのですが……。

「弾の鉛が毒となつて体に回り始めるんだ。気分がよくなつたからといって油断は禁物さ。様態が急変することもありうる」

オランダで医学を学んだ高松凌雲先生は、度々私に注意を促しました。伊庭さんの体の中にある弾は摘出手術が難しく、そのままの状態でした。明治二年五月のことです。蝦夷地には遅い春がおとすれていました。

「田村君、酒は？」

伊庭さんはそう訊きます。

「酒は富士見酒にかぎる、という話しをきいたことがあり

ます」

「富士見酒」というのは、江戸でいうところの飛び切りの新酒のことで摂津の酒郷を出た樽は熊野灘の荒波をこえ、駿河で富士を眺めつつ江戸に下ってきました。その間、波にもまれて樽材の杉と融合し、何ともいえぬ味わいを醸し出す、といわれてます。

私は江戸お府の経験もあった父からこうした話しをよくきかされたのですが、正直いって、このときはまだ十四五歳。酒の味など分かうはずありません。返答に窮していると、

「おれは京にいたとき、よく飲み食いましたものさ。酒もいろいろが上方の食べ物ほもつといい。上手くはいえねえが、江戸とは違う」

「何を召し上がつたんです？」

「そうさな、鰻、そば、うどん、豆腐や田楽、アヒル、浜料理、何でも食つた。うまかつたなあ」

伊庭さんはとても懐かしそうでした。

「この日、八郎は宿舎に草鞋を脱ぐと、どかつ、と力なく畳に座り込み、

「おい、腹がへらねえかい」

襖を隔てて棟続きに間借りする同僚へ首をねじ曲げながら訊いた。

「伏見で食したばかりだろう」

「そりやそうだが、ここまでくる沿道の見物人が多けりや
気が張るし、腹も減るつてもんだぜ」

「そんなもんかえ」

同僚は笑った。八郎はぼんやりと天上を眺め、伏見から
洛中までの街道を思いだしている。腹が減っては、このこ
とでいうと、八郎は我慢できぬたちだ。

「御城近くに鰻の旨い店があります」

宿舎の主人から情報を仕入れるやさつそく出掛けた。

鰻は八郎の好物だ。江戸では元禄年間に蒲焼き屋が登場
して以来、職人らの欠かさぬ栄養源となった。「鰻が変じ
て山の芋」という言い伝えには、体力と根気が勝負の職人
仕事に「精」と「根」を補給する鰻が最適、という意味も
込められているのだろう。一説には百万都市だった江戸の
生活排水が、濠端や河口付近に住む鰻を高値で取り引きさ
れる食用牛のように肥えさせ、その上質さゆえに庶民でグ
ルメの一品となった、ともいう。八郎がこの日、訪れた店
は二条城に近い「沢甚」という料理屋で、その味は八郎の
舌を十分に満足させた。

けれども数日後、梅花見物に出かけた下鴨神社からの帰
り、鴨川沿いの店で食べた鰻には失望した。たぶん上方の
料理法と味付けが江戸っ子の八郎に合わなかったのだろう。
鰻の割り方は「江戸の背割り、上方の腹開き」だ。武士の

人口が多い江戸では腹を切るのを忌んで背を割った。焼き
方も蒸して脂をぬき、ふつくらと焼くが、上方では蒸さずに
こんがりと焼き、こつてりとした味を出すのが主流だ。

「なんでえ、こりや。金串しの味ばかりで、鰻の旨さがね
え。この店は川魚が自慢じゃなかったのかい」

別な日には明け番の剣術の稽古後、講武所の仲間数人と
洛南の東寺や西本願寺飛雲閣の見物へも出かけた。その途
中、西本願寺に近い東塩小路村のある飯屋で食事を兼ねて
休息した。注文を終えた八郎は、出された茶をすすつてい
たが、隣席とを隔てるつい立ての後ろからこの村の役職ら
しい二人の会話が聞こえてきた。

「そやけど、こんどの公方様の入洛は何にもいいことがあ
らへん」

「……？」

「めったなんこと口にするもんやない」

「けどな、ここ数年、ものの値が異常なくらいに上がって
わしらの懐は窮々や。米だけやあらへん。野菜も醬油も油
も、何を買うにも容易にならん」

聞き耳をたてていた八郎は、ちよつとだけ後ろを振り返
った。紋付の羽織に仙台袴、年の頃四、五十といった男二
人が酒を酌み交わしている。着物の仕立てといい、恰幅の
ある体格から察するにこの近所の豪農らしい。どこかで会
合があつての帰りなのだろう。

「米なんかはな、一石でまた十五匁近く上がり、万延・文久のころに逆戻りしそうな勢いや。これは米だけに限ったことやない」

江戸の職人である木挽の挽賃は銀一匁二分で物価上昇分ほど上がっていない。米価上昇は庶民にとつて死活問題だ。八郎も京へ来から旧所名跡で土産を買ったり、名物を食ったりしているうちに実感したことだ。

明ヶ番朝五ツ時帰宅、今日東福寺へ参詣大仏三十三間堂見物（中略）帰り道二条通りニテ夕飯を食し鯉もろこ玉子焼尤も高料……

二月十五日の日記にそう記したが、当時の物価高は安政の開国による高騰に端を発している。その後、天候不順で米や野菜の凶、豊作が繰り返され、それまで正常に機能していた需給バランスが雪崩をうつようにくずれた。さらに京では朝野の政争で、上は將軍から下は埃まみれの浪人まで武士が大挙上洛し、数年前から慢性的に物資が不足した。この村役人からみれば、武士なんぞは刃物を携帯したただ破落戸であり、結局、割りを食うのは一般庶民のわしらや、ということなのだ。

八郎らの席に田楽が運ばれてきた。短冊に切り分けた木綿豆腐に串が刺さっている。皿にのつた豆腐の表と裏のあ

ぶつた黄金色が食欲をそそった。八郎はその皿の一つをとると、はふはふ言いながら口に運んだ。うまい、と思った。豆腐は京の名産だ。仕上げの味噌も良かった。口中でとろけた味には柚子や胡麻が混ぜ込まれているようだった。

「もうひとつ、大きな問題がある」

膳を挟み、同僚の村役人を前に息巻く、*「恰幅男」*は、ぐいつ、と酒をあおると、ため息をついた。八郎はその男どもが何を食べているのかが気になった。偶然だが田楽だ。

（二本差しが恐くて田楽が食えるか）

八郎はそんな言葉を思い出していた。幼いころ寄席帰りの父が嘸できいたセリフを八郎にきかせた。武士に対する町人の啖呵だ。この村役人を見ていると寄席できく町人がナマ演技しているような気になった。京坂では江戸とは異なり、先の割れた細い竹串を二本田楽に刺して食べることから、上方から広まったセリフともいわれる。

村役人は田楽を頬張りつつ顔を紅潮させながら続けた。

「公方様からちようだいした祝儀銀のことや。家持ちのわしらが何で家を借りている者どもと同じ額や。納得いかんで。借家の連中は一人者が多いさかい、思わぬ収入に飛び上がりたい心境やろうが、家族もいて使用人もいるわしらは泣きたい気分や」

幕府は家茂入京のとき、三代將軍の上洛にならい銀五千貫を祝儀として京の市中に落とした。しかし、京の町組の

ほとんどで借家の数が急増している実情に配慮し、家持・借家の区別なく同額を配分した。そのため家持ちの豪農から方針を決めた京都町奉行に批難の声があがった。

（そんなことがあったのか）

初めてきく話に、八郎は目をパチクリした。將軍警護役の八郎に祝儀銀の配分などは思いもよらぬ話題だ。

「町政を仕切るのはわしら家持ちのものだけや。祇園会や地藏盆の采配は誰が苦労してやってん。みんなわしらや。呑気に暮らしている借家の連中とは違うわい」

「先日、町方の寄り合いではな、壬生村の役人が泣きつくようにいつておったわ」

「何をや」

「あそこは去年から壬生浪がたむろしておるやろ。最初は二十人ほどしかおらんかったのが、ひと月ごとに得体の知れない浪人が増え続け、いまや百人近くも間借りしているそうや。やつらの分まで祝儀を貰わんと村の皆みなが破産してしまふ、といったった」

「ほんまか？」

「たずねていく浪人もな、着るもの貧乏で、食いものもろくに口に入らぬ者が多いらしい。国事だ、などといいくさつて、そんなやつらに食いつかれたらたまらん」

壬生浪とは京の町方が呼ぶ新選組の蔑称だ。この正月の將軍上洛のときに、見慣れぬ集団が八郎ら供の後方に混じ

っていた。だんだらを染め、赤穂義士が討ち入りに着たような羽織をみな着用していた。

「やつら二言めには、公儀の御用だ、などといって市中の本店や大坂の豪商から金を巻き上げているらしいで。夜は遅くまで酒をくらい、島原の芸妓を連れ込んだりして、そのへんの破落戸と何も変わりあらへん」

襖隣の村役人らは、さんざん、新選組やそれを雇っている幕府の悪口を言い放った。

八郎は抱えるべき幕府が民から冷ややかにみられていることを初めて知った――

「田村君はこの戦が終わればどうする？」

ある天気の良い朝、伊庭さんは突然、そんなことをたずねたりしました。

「今は何も考えていません」

「おれはね、諸国を旅してみたい。その土地どちの旨いものを食い、いい景色を眺めて思うところのままを文字に綴る。そうさな、芭蕉のような旅かな」

「江戸の道場はどうなさるんです？」

そう訊くと、それまで明るかった伊庭さんの表情が陰ったのをいまでも鮮明に覚えています。しまった、と思いました。

「まあ、官軍におれたちと和解するだけの度量があればの

話したがね」

急に現実に戻され、振り返った背中が寂しそうでした。付け加えますが、この数日後、私も酒の味が少し分かるような気がしたものです。それは、榎本総裁が私たち年少の者らに度々見せていた本を官軍の参謀に届けた翌日のことでした。

「焼けてはいけな大切な本だ」

私にはよく理解できませんでしたが、海の方法を記した本、とかおっしゃっていました。そのお礼で官軍の参謀から酒三樽と肴が贈られてきました。私たちはそれを飲み、その夜は大いに騒ぎました。なにやらほろ苦い味がしたので覚えていきます。五稜郭開城の数日前のことでした。

四

五稜郭に籠もる旧幕軍にとって運命の日が近づいていました。

官軍が総攻撃を開始したのは明治二年五月十一日早朝のことです。この日弘暁、松平副総裁をはじめ土方副長や島田さんなど新選組の面々も桔梗野谷の戦地へ赴きました。

伊庭さんの具合は芳しくありません。ときどき苦痛に顔をしかめ、何度か食べたものを吐きました。が、またすぐ口にします。

「喰わねえと体がもたんよ」

そういいながら懐手をしている左手はそのままに、右手で器用に箸とお椀を操って、食事をしていました。

「器用ですね」

私は遠慮がちにそう訊きました。しかし、体のほうが受け付けなくなっていました。息もできぬほどの咳に襲われたかと思うと、白い肌からすうつ、と血の気が引き、死人のように透きとおった顔になります。私は空恐ろしくなり、幾度となく病室の外でガタガタと震えました。

「五月か……」

伊庭さんがそういつて、深く息を押し殺す日が数日続きました。

——八郎は將軍家茂が京から大坂へ下るのに随行するため、明け六ツ（午前六時）ごろ、二条城を出発した。朝からどんよりと雲が垂れ下がっていた。

「この分じゃ、伏見に着くころには雨が降りだすかもしれないせぬ」

八郎は組頭の忠内次郎三を宿舎で出迎え、空模様を眺めながらいうと、

「道中、雨具の用意だけはしっかりとしておいたほうがいいかもしれません」

忠内は真顔でいった。当たり前のことにも真剣にこたえ

るこの五歳年上の先輩の実直さに、八郎は内心おかしかつた。

二条城を出た駕籠は、堀川通を南下し四条通に折れ、寺町から大仏殿を横目に伏見に向かう。道は狭い所で二間半（約五メートル）。大人三人が手を広げるといっぱいになるほどの幅しかない。街中は、この物々しい行列で溢れんばかりに人が充滿していた。駕籠は伏見街道を下り、途中、伏見稲荷前で小休止した。そして、五ツ半（午前九時）ごろ、御香宮を経て奉行所を右手に將軍の舟乗場である豊後橋（現・観月橋）を目指した。大坂まではみな舟で下る。八郎らの乗る船は將軍のとは違つて通常淀川を上下している「三十石船」とよばれる苦船だ。

「何かこう狭いんじゃねえのかい」

乗船するなり、八郎はとなりの男につぶやいてみたが、幅二間（約三・六メートル）ほどしかない船に、舳先から艫までびっしりと供の者どもが押し合つた。みなも苦笑いするだけで、どうすることもできない。

河の流れにのり船が岸を離れると、四人の船頭が艫をこいでいく。宇治川と木津川が合流するあたりで淀の城と水車を眺めると、やがてゆつくりした小唄がきこえた。

此処は大塚原の茶屋よ 向ふは枚方番所浦

（ここはどこよ（ぞい・じゃい）と船頭に問えば ここは

枚方鍵屋浦

ここは枚方がぎやの浦よ 綱も碇も手につかぬ
鍵屋浦には碇が要らぬ 三味や太鼓で船止める。

船頭は小唄を唄いながら棹をさしていたが、船が伏見と大坂のほぼ中間の河内枚方までくると、一段と大きな声でその喉を震わせた。船頭の声を頼りに岸のほうから茶船が数隻八郎ら供の乗る船に近づいてくる。その船に乗る男女が、

「酒くらわんか、餅くらわんか」

声を張り上げているのがきこえた。

（これが枚方のくらわんか餅か）

河内枚方は数ある東海道の宿場のなかでも、上りと下りの人の往来が均等ではない。京から大坂への道中、ほとんどの旅人が淀川の船便を使うためだが、この船便に目をつけたのが、いわゆる「くらわんか船」で徳川初期にその権利が保障されてから、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」など滑稽本に記されたり、安藤広重の版画の題材になったりした。

八郎は、船から差し出された「くらわんか餅」を手にし、この高名な食べ物を口に放り込もうとしていた。

（へえ、白い餅に串がさしてあらあ。すこしあぶつてるし、味噌までぬつてやがる）

どれどれ、と一口、舌のうえで転がしてみた。田楽のよ
うな味がして存外旨い。八郎のまわりからも感嘆の声
があがった。組頭の忠内も満足そうな顔つきで口元を動か
している。八郎は餅と一緒に出された牛勝汁を飲んだ。さ
ほど味がしない。牛勝汁を入れた器を土地では「くらわんか
茶碗」といい、明治になってから川に投げ込まれた茶碗が
河川改修などで次々とすくい上げられると、好事家などに
珍重された。

大坂に入った家茂は、兵庫や建設中の堺・南台場などを
視察。その後、天保山沖から海路江戸に向かった。この
とき父の軍兵衛も同行し帰府した。

八郎ら講武所組は江戸帰府の要請を断っている。公務も
離れ、もう少し上方にいたい、という希望を忠内次郎三に
申し入れ、許しを得た。忠内は八郎ら大坂居残り組の責任
者の立場になつていた。今度はいつ来られるかもしれず、
上方に在しているうちにいろいろなものを見て食べて、が
皆の一致した意見で「どうだ、あすは堺浦、明後日は泊ま
りがけで奈良にいつてみないか」と旅の提案も出た。

梅雨の台間の晴れた日、八郎らは朝早くに堺へ出発した。
大坂での八郎らの宿舎は谷町筋の大仙寺。その筋を天王寺
へ南下する。左右の白壁を眺めながら歩く八郎らの首筋に
は、うっすらと汗がにじみでていた。加賀藩大坂蔵屋敷の
菩提寺という太平寺を過ぎ、四天王寺の五重塔を左手に見

ながらゆるやかな坂を下っていくと住吉にたどり着く。さ
らに一刻ほど歩き、大和川を渡ると中世の自由都市・堺を
象徴する環濠が見えてくる。

「堺の浜料理つてのは何が旨いんだい」

八郎は仲間の一人に問うた。

「おれがきいたところでは桜鯛が名物らしい。もうすぐ
まい浜料理が食べられるぜ」

堺奉行所をぐるりと囲む白壁を眺めながら、五人は大小
路通を右に折れて浜に向かった。通りの左右には中世の残
映とも思える景色が広がる。豪奢な家が見受けられたと思
つたら、その隣地には草に埋もれた廃虚が幾つも軒を並べ
ていた。

「桜鯛かあ。刺身にして喰うとさぞ旨いんだろうなあ」

戎島という界限から港を眺めた。前浜に陸揚げする鯛料
理の茶屋が幾つも軒を並べていた。港を挟んで見える小高
い丘には砲台が据え付けられていた。その先には築場中の
南台場があつて、多くの職人が現場に出入りしているのが
見えた。

「上様はここをご覧になられたのか」

「ところで八郎、たらふく喰つてもいいが、先月のように
差し込みで数日寝込むことだけはないようにな」

（何をいいやがる）

八郎は苦笑した。一月前にもらった赤貝を食べてあつ

たらしく、数日寝込んだことがあった。この堺のグルメツア―は後日、日記に「取々見物堺ニテ浜料理を食し鯛かれひ其外品々之馬生魚沢山見物久々ニテ大楽いたし候」と大書した――

「次の日は一泊の予定で奈良にいかれたのですか？」

私は伊庭さんにたずねました。

「そうさ、河内枚岡から暗闇峠を越えたんだ。九里ほどあったかな。八ツ半（午後三時）ごろ着いた」

「それから何か見物なさったのですか？」

「興福寺や春日大仏なんかを見たなあ」

伊庭さんは少しうれしそうに話しました。私なんぞは、

箱根の山すら越えたことはなく、まして上方などは夢のような土地に思え、このときの伊庭さんがとても羨ましかったのを覚えています。

「田村君は俳句や短歌はやるのかい？」

「作ったことはありませんが……。漢詩には少し興味を持っています」

「おらあね、あの旅の翌日、宿の近くの妙法寺という寺にいったんだ」

「何かあったのですか？」

「あの寺は『妙法松』と呼ばれる浪華一の大松で有名ならしいのさ。そこで、朝早くから松見物に出かけたんだが、偶

然、境内に芭蕉の句碑を見つけたんだ」

「それに刺激されて」

「そう、二句を詠んだ」

朝涼や人より先へ渡りふね 忠助今日より参ル
其むかし都のあとやせみしくれ

「どうだい？」

「私には俳詩を論ずる資格や教養もありませんが。でも俳句のほうは、奈良の旅で感じた思いがそのまま直線的に反映されているように思えます」

「素直すぎるのかなあ」

伊庭さんはそういうと、窓の外に目を移しました。海に日の光がまばゆい。

「あの朝も、妙法寺の境内は目を浴びて輝いていたんだ」

「……」

「おれは、詠んだ二句を改めて手帳に書き移しながら、庭の草木に目をやったんだ。短い時間に一段と緑色が濃くなるようで、新しい一日を必死に生きようとする、そう感じられる時間に共感した」

伊庭さんはまたため息をつきました。

「あのときの仲間も、今度のいくさですいぶん死んだ。ある者は彰義隊と上野の山に屍を晒し、極寒の東北で深い山

中に打ち捨てられた者もいる。先月のいくさでは、忠内さんも岡田も、親友の本山小太郎まで死んでしまった」

伊庭さんの目には涙がいつぱい溜まっていました。

先月十七日のいくさは、伊庭さんが負傷した戦いでした。私は将来のことを伊庭さんに相談してみたくなり、ふと、

「この先、私たちはどうなるのでしょうか？」

「田村君」

「はい」

「死ぬのが恐いか？」

「武士としていつでも死ぬ覚悟はできていますが、本当のところは分かりません」

「おれは死ぬのが怖い。一つしかない命だからな」

ベッドに横たわりながら伊庭さんはそういいました。すこし息が荒くなっているのが気になりました。この夜、桔梗野の戦闘はまだ続いています。

「だがね、勝敗は時の運というだろう。こんどのいくさも薩長の連中が勝つか、おれたちが勝つかわからねえ。それと同じでいつ死がおとずれるかは見当がつかないものさ」

伊庭さんは昨年来、鳥羽伏見から箱根、そしてこの箱館と戦いを重ねました。安房銚子沖で乗船した美加保丸が座礁したり、潜伏中の横浜で官軍の兵に襲撃されかかったり、何度も死地を潜り抜けてきた人です。言葉の一つひとつに重みを感じられました。

「おれはね死ぬのは怖い。だが、いつ死ぬかもしれぬという思いは常に抱いているつもりさ。それは誰もが持つ考えじゃねえのかな。太古の昔から長い時間をかけて、人間が営みのなかで体得した本能みたいなものかもしれねえ。そう考えれば何でもできるものだぜ」

伊庭さんの顔は優しく凛々かった。そういうなり、すうつと眠りに落ちたようでした。

翌日、私どもの箱館病院に驚くべき報告が寄せられました。桔梗野の旧幕軍が鎮圧され、新選組も壊滅したらしい。土方副長は戦死した、との一報でした。

五

箱館は旧幕軍の拠点である五稜郭と弁天、千代ヶ岱の両台場を除き、官軍に制圧されました。私たちは袋の鼠でした。弥生坂上の箱館病院は院長の高松凌雲先生が、

「世界には赤十字の精神があり、国際法でも捕虜の虐待は禁止している。けが人や病人に敵、味方はない。医者には傷ついた人を助ける、それだけである」

との信念を貫き、中立の立場を取っていました。以前も薩摩の将校が大勢の兵を率いて乗り込んできましたが、先生はその説を曲げず毅然としていました。後日、知ったことです。高松先生の論をきいた官軍参謀の黒田了介という

人は、

「さすがは高松凌雲先生。あそこだけは手をだしてはなりもはん」

全軍に達示を出していたそうです。

十一日の戦いで遊撃隊でも多くの隊士が負傷しました。小柳津要人さん、新見源七郎さんら五、六人が次々と病院に運ばれ治療を受けました。

伊庭さんも危険な状態です。弾を抜くと出血が激しくなり死ぬ、ということまで胸から腹部にめりこんだ弾丸を摘出することもできず、有効な治療方法がありません。伊庭さんの胸は紫色に変色し、腐蝕が始まっていたようですが、伊庭さんは一度も「痛い」と口にすることはありませんでした。ただ、このころになると意識はほとんどなくなり、私の問いかけにもわずかに反応するほどにまで深刻になっていました。

「おらあね、道場は継がないよ。いや継ぐことができねえのかな」

伊庭さんは元気なころ、そういつて笑ったことがありました。江戸の道場の話しになると、うれしそうに父上様や門人の方々、親友たちの思い出を語りました。時を忘れるほど熱中し、話し疲れてそのままベットに寝入ってしまうこともしばしばでした。そのときの寝顔は幸せそうでした。それはきつと戦場で味わう死の孤独感から一時でも解放さ

れるからなのでしょう。

「伊庭さん、あなたは決して一人ではないし、孤独でもない。ここに同志がたくさんいるじやありませんか」

私は励ましたかった。遊撃隊の方々も、この病院にいる兵士たちも、さらには官軍の負傷者ですら私たちの同志なのではなかったでしょうか。

「伊庭さん……」

時折、唸り声をあげる伊庭さんの腕を、私は一晩中握りしめていました。

——慶応三年（一八六七年）、江戸。

伊庭道場のある御徒町にも秋が深まったころ、一人の若者が門を叩いた。色白で背が高く、まだ少年の面影を残した顔に精気がみなぎっている。

（役者のような男だ）

たまたま道場で素振りをしていた八郎が目を細めた。

「拙者、上州血洗島の生まれで渋沢平九郎と申します。先年従兄がこの道場にお世話になり、その紹介で参上仕りました」

少年は慣れぬ侍言葉で挨拶した後、八郎にべこりと頭を下げた。

「通われていた従兄とはどなたです？」

「渋沢栄一といい、慶喜公が一橋家においでだったころ、

側に仕えておりました」

〔洪沢？〕

八郎はしばらく考えたが、慶喜が將軍になったとき、陸軍調役の職に一橋家から入った洪沢成一郎という男が就いた、と父の軍兵衛から聞いたことを思い出した。

「それも私の血筋の者です。栄一の従兄で、同じ血洗島の出です」

八郎は平九郎の体をじろりと眺めた。五尺は超えようかという長身だが、肉づきは薄く瘦せ気味である。

「洪沢殿、剣術の経験は？」

「上州の田舎道場には少し通つたことがあります」

「素振りをしてみなさい」

八郎は自分の持つていた木刀を平九郎に手渡した。平九郎は庭先で四、五度ほど振つてみたが、いかにも素人臭かった。

〔田舎剣術だが、筋はよさそうだ〕

八郎はその夜、軍兵衛の許可をあおいだ。その翌日から平九郎は道場に通い始めた。初心者への八郎の稽古は徹底している。素振りだ。ひたすら木刀を振る。それが剣のスピードとパワーを増す唯一の方法であると八郎は信じていた。心形刀流の型などはその後教えても十分であり、その前に剣の動きを俊敏にすること、撃剣の力を蓄えることが重要であった。

平九郎は八郎の指導を守つた。朝から晩まで木刀を振り続け、同じ道場の者らから、

「あんなふうには素振りばかりしていたら三日ともたない」

陰口を叩かれても、百回、五百回と振り上げては下ろす動作を繰り返した。

平九郎が道場で門人たちの失笑を買いつつ木刀を振つてゐるころ、居間で読書をしている八郎に驚くべき情報もたらされた。京の將軍慶喜が大政奉還した、という。二条城に諸大名を集め宣言したらしい。

〔これはいくさになる〕

八郎はそう思った。幕臣の間では薩長の口車に朝廷が動かされているとの見方が多く、特に京の情勢に疎い江戸の幕臣にはそうした考えが主流を占めていた。

その夜、勤めから戻つた軍兵衛を部屋にたずねた。

「大政奉還の件、本当でしょうか？」

「間違ひあるまい。御城内はこの話して右往左往だ」

「いくさ、になりましような」

「上様がどのような状況で判断されたのか分からぬゆえ、どう動くのか予想がつかねるが、心積りはしておいたほうがいい」

軍兵衛と八郎は一年前、奥詰と講武所が遊撃隊と改編されたとき、そのまま隊に入つた。今度の政変で上洛の命が下ることは十分に予想できた。軍兵衛が遊撃隊の頭取（副

長格」に就いている以上、他日、自分も京も向うことになるだろう、と八郎は考えた。

その翌日、八郎は実弟の亥朔を自室に呼んだ。数日來の好天が崩れ、朝から木枯らしが雨戸を激しくたたいた。

「これから、おれの言うことをよく聞いてくれ」

八郎の前に正している亥朔を見つめた。

「今度のことは聞いているだろう」

亥朔はこつくりとうなずいた。

「おれと父上には近日中、上洛の沙汰が下るはずだ。京ではいくさになるかも知れぬ。いくさになれば、薩長の連中を追って西国に向かうことになるう」

「……」

「だがな、いくさの勝敗は時の運だ。負けるかもしれない。そのときは父上もおれも死ぬつもりでいる」

「兄上」

「お前にはこの道場を、そして江戸をしつかりと守ってもらいたいのだ。これから死ぬかもしれねえ男に跡継ぎの資格はない。その権利はお前が引き継いでくれ」

「何をいいな。兄上の話はおかしい。死ぬと決めているではありませんか」

亥朔は語気を強めた。顔が上気している。

「いいからお聞き。どんな剣の使い手でも一瞬の隙を突かれることがある。薩長は手足れた連中さ。これからどんな

手を使うのか見当もつかねえ」

「しかし」

「それとな、いくさに犠牲はつきものだ。多くの屍の上に勝利がある。前線が尽きたとき、後詰めのお前さんたちが気張らねば江戸はどうなる。道場や家族は……。何代も受け継ぎ築いてきた江戸のしきたりが西国の連中に蹂躪されてもいいのかい」

「……」

「おれはその一事だけでも死ぬる価値があると思うがね。負けはしねえよ。父上と供に江戸に戻ってくるさ」

八郎はそういうと、微少した。亥朔の目には涙がいつばいに溜まっている。

「もうひとつ。新しく入門した渋沢平九郎には目をかけてやってくれ。あいつ、素振りしろといったら一日中、千回でも二千回でも振り続けやがる。いい根性しているよ」

上洛の命が下った八郎は出発準備に忙殺されていたが、わずかな時間でも得ると本を読んでいた。

「本当に本が好きなのですね」

八郎の部屋をたずねてきた平九郎がそういって、あたりを見渡した。襖の前には旅の荷物があるほか、壁の隙間はほとんど本で埋まっている。

「きたかい。それも幼い時代からの勉学の虫ってやつかな。なにせ、おれの親父は歴史好きだったからな」

八郎の実父、軍兵衛秀業は剣術以外にはあまり趣味もなかった。たまに、講釈師の話をききにいくけど一緒に寄席はどうだい、と八郎を誘った。寄席できくはなしは軍記ものが多く、「いやあ、きょうのはよかった」などと、帰ってから満足そうな顔をしたりしていたが、その小太りな体をゆすりながら軍書本や歴史書を読んでいるのを、八郎は幼いときに見たことがあった。歴史の知識は主に書物から吸収していたようだ。

「ところで渋沢君、話してのは何だい」

八郎は問うた。

「いつ出立なされるのです」

「あさつてかな」

「いくさになるのでしょうか？」

「さあね、君はどうするんだい？ 従兄が京にいるんじゃないかい」

「ぼくは江戸で、もう少し修業させてもらいます。江戸を離れることができない理由があるのです」

「そいつは構わねえが、その理由つてのをよかつたらきかせてもらえないか」

八郎はそういうと、平九郎の前に座り直した。外からは雀の音がきこえる。

「もう一人の従兄栄一はいま公儀の役目でパリに行つていますが、その栄一が出発前に養子の相談を持ちかけてきた

のです」

「ほう」

「海外渡航する者は跡目を定めよ、という法度があるらしいのです。パリで一事あれば渋沢家が大変だ、ともいう。栄一はぼくの実姉と結婚しているのですが、子がまだありません。だから養子になれというのです」

「……」

「ぼくはそれを迷っています」

八郎は覺を見つめながら、平九郎の話をきいていたが、やがて傍らにあつた本を手に取りながら打ち明けた。

「おれも昔は、伊庭家の跡継ぎには向かねえなどと門人たちにいわれたものさ」

八郎は少年のころ、剣術よりも書物に熱をあげていた。

伊庭道場の門人で八郎の兄的存在だった中根淑（幕臣、八郎とともに戊辰戦争に参加。維新後、香亭の号で数多くの著作を残した）がある日、暇さえあれば読書している八郎を見て、

「八郎殿、ずいぶん熱心に書物を読んでいるようだ、何を読んでいなさる？」

八郎の頭ごしに机の上をのぞき込んでみると、無言のままに書に目をうつしている。

「宮崎の塾できょうはここを必ず覚えるようにといわれました」

「ぼそぼそと呟きながら、

「ほくは、体が弱くて剣術の稽古はきつい。こうしているのが幸せなんです」

と答えたという。中根は八郎を十代目の跡継ぎとして見ていたので、道場の将来に不安を持ったらしい。

「家なんかは忘れることだ」

「おれは昔、読書ばかりしていたので腕の立つ連中が父に跡継ぎを名乗りでていたらしい。心形刀流は門人で優れた者を跡継ぎにする慣わしだからさ」

平九郎は八郎の顔を凝視している。

「おれもそれで十分だと思った。いや、今でもそう考えているんだ。家はその業に適した者が継ぐ。どんなに周りがおかしくなってもそれだけは決して絶えることはない」

「……」

「あとは、自分がどう振る舞うかだろう。おのれが目で見えて、聴いて判断する。問題はここさ。自分が決めた行動に間違いがあつちやならねえよ」

「八郎さんは十代目を継ぐんじゃ……」

「泰平の世ならそうしたが、今度はそうはいかねえ。十代目は弟に譲ったところさ」

平九郎は窓の外をふと眺めた。平九郎にとって洪沢家の継承は大きな問題であつた。栄一の養子になることは武士になることで、幕臣への立身出世を意味した。血洗島の生

家は富豪の農家で恵まれた環境に育った。早くから従兄や実兄が幕末の風雲に飛び出し、武士という身分に強烈な憧れを抱いていた。

「十代目を亥朔さんに譲って、伊庭さんはどうするつもりですか」

「おれはね、先代の上様にずいぶんと目をかけてもらった。元治のころ京の二条城で初めて拝謁を賜ったが、そのとき、この人のために働こうと思った。その先代は先年お亡くなりになったがね」

前將軍の家茂は、長州征伐の陣中だった慶応二年七月二十日、大坂城でその若い命を終えた。

「弔い合戦さ。おれは父に一事あれば死ぬつもりだ、といったら父は許してくれたよ」

「わかりました。よく考えてみます」

平九郎はそういうと、八郎の部屋を後にした。これが八郎を見た最後になった。

平九郎はしばらく伊庭道場に通っていたが、栄一の養子となることを決めて道場を辞した。翌年鳥羽伏見の戦いで敗走した幕軍とともに江戸に戻ってきた従兄の洪沢成一郎と彰義隊に参加。上野の寛永寺に謹慎する慶喜の護衛で山の外廻りに駐屯した。このとき、慶喜の側近を固めていたのが八郎たちの遊撃隊だったが、二人とも顔をあわせることはなかった。その年の五月、彰義隊が官軍に一蹴される

と、武州・飯能で官軍に属する諸藩と一戦を交えたが敗退。秩父の山中で自刃した。享年二十一——

六

三日後の十五日、弁天と千代ヶ岱の両台場が陥落、台場を守っていた中島三郎助さまが二人の子息ともども戦死なさいました。

五稜郭はまったく孤立してしまいました。この夜の軍議で籠城し徹底抗戦と決まりましたが、箱館病院にいる病人や負傷者は主戦場から離れた湯の川温泉に移そうということになりました。移動準備が行なわれていたとき、

「田村君、おれは行かないよ」

伊庭さんが口を開きました。

「どこにですか？」

私はわざと優しい口調で語りかけました。

「湯の川にさ」

伊庭さんは苦しそうにいい張ります。

「なぜです。もうそんな体では戦うことはできない。湯の川に行けば命は助かるのです。命があつてこそ官軍ともう一戦できるということではないですか」

私は口調を強めていいました。

「皆は籠城して果てるつもりなのだろう。おれもそうさせ

ていただく。五稜郭に連れていってくれ」

「なぜなのでしょう。伊庭さんはもう十分に戦われた。生還して何の恥になりましょう。百万の江戸ッ子は拍手喝采してあなたを迎えるはずですよ」

「君はどうするつもりだい」

「ほくは……」

「もちろん、五稜郭に籠もるはずさ。おれも君と同じ気持ちでいる。分かってくれるね。これはおれ自身が決めたことなんだ」

伊庭さんの懇願に私は困り果てました。高松凌雲先生にも相談しましたが、本人が望むなら仕方なからう、ということでは五稜郭に移動することになりました。ほかの負傷者二百人は湯の川温泉に出発しました。

翌十六日、官軍の攻撃はさらに激しくなりました。箱館湾からの艦砲射撃が精度を高め、五稜郭政庁舎の屋根を吹き飛ばしました。郭内で砲弾がドーン、と破裂します。その音が聞こえるたび、伊庭さんは閉じていた眼を開き、ウーン、と猛獣のような唸り声を上げるのです。

この夜の軍議では、これ以上の犠牲者を避けるために潔く降伏して広く裁きの場で意見を主張しよう、という派と籠城し討ち死をという抗戦派が対立しました。榎本総裁はこのいくさの首謀者は私なのだから、自分が一番に軍門に下つて皆の赦免を申し出る、といいましたが、結局この夜

は物別れに終わりました。榎本総裁はこのとき、腹を切る覚悟を決めていたのです。

—明治三十四年（一九〇一年）、東京。

この日、東京市の参事会議事堂に急ぐ一人の男があった。会議の終わる午後三時には着きたい、と早めに自宅を出た。黒緞の紋付羽織に仙台袴のその男は、蒸し暑い梅雨のさなか首筋の汗を拭いながら歩く。ときどき懷中に手を忍ばせた。懷には短刀を隠し持っている。鐔元を握りながら、あの男の顔を思い出した。虫酸が走るような気がして、ベツ、と唾を路上に吐いた。

あの男とは榎本武揚である。

榎本は五稜郭開城の前夜、腹を切るつもりで自室に籠り、短刀を突き立てようとしたところ、たまたま部屋をたずねた大塚雷之丞（彰義隊士、のち大塚賀久治と改名。維新後は北海道小樽に移り、公共事業などに尽くした。明治三十八年没）に制止された。

「いま総裁が死んでも、それで皆が許されるものではない。同士の前途を見届けるのも貴方の役目ではないか」

駆けつけた閣僚たちに説かれて思いとどまった。官軍に投降し、獄中を経て明治五年に釈放。すぐ新政府の開拓使となり北海道に赴任した。

その後、旧幕臣らの子弟教育を支援しようと明治十六年

に「徳川育英会」ができたとき、榎本が会長に就任した。

榎本は幹事役に一人の男を推薦した。その男が、いま議事堂に向かつて歩を急ぐ伊庭想太郎であった。想太郎の旧名は亥朔。推薦された理由は箱館で戦死した兄の八郎と榎本の縁がきつかけだ。心形刀流の道場を継ぎ、維新後の文明開化のなかで貧々と暮らしていた伊庭家を救おうと榎本が手を差し伸べた。明治二十六年に育英会が新しく創立した東京農学校の校長にも抜擢している。

しかし、その後学校経営が苦境に陥るや、榎本はその責任をすぐに放り出した。

「自分勝手ではないか」

想太郎や学校関係者が榎本に詰め寄った。とくに想太郎は箱館戦の往時を説きながら榎本に翻意を促したのだが、そのときも片手にブランデーのグラスを揺らしながら、不敵な微笑を浮かべ、

「伊庭君、もう時代が違うんだよ」

といい残し、強引に辞めてしまった。

想太郎が榎本に不信任を抱いたのはこのときからだ。たまたもと、新政府に最後まで反抗したくせに、釈放されるや開拓使長官や農商務大臣など新政府の要職を次々と引き受けたことも氣にくなかった。

（戊辰の乱で死んだ兄が浮かばれぬわ。あの男を慕って箱館に散った多くの英霊が許さずにいよう）

想太郎は八郎の遺志を継ぐことで維新後三十余年を過してきた。

（兄の名が汚された）

復讐を計画した。その大願の前に、仇を震撼させるほどの生けにえが必要だと考え、榎本の幹旋により就いた職で関わりのある教育界から標的を選んだ。東京市の教育会長で市会議員の星亨はこの当時、東京市会疑獄事件との関係を描き、**「公盗の巨魁」**として新聞から攻撃されていた。逮捕者が続出し、内閣に迷惑のかかることを恐れて逋信大臣は辞したが、恥することは何もない、と公言し市会首領には依然としておさまっていた。

（奸賊め……）

想太郎はそう呪った。市の教育行政トップに立つ男ながら、星のことを評した記事には**「収賄」「策謀」「恐喝」「罪状」**などの見出しが必ず踊った。想太郎は市教育会の会合などで星と同席することを嫌ったし、このような男が東京市の幹部でいるのを許すことができないでいた。

「江戸はお前たちが守らんでどうする」

想太郎は兄の言葉をいまさらながらに思い出していった。

（星を斬ろう。そしてその次は……）

凶行はあつてなく済んだ。議事堂に入った想太郎は談笑していた星に面会人を装って接近し、ヒラリと振り上げた短刀で星の右腹を刺すや左脇腹へ致命の刀を加えた。この

間、わずかに数十秒だったという。

想太郎は、この事件で逮捕され、鍛冶橋監獄署の独房に入れられた。獄中で病氣となつて六年後、虫のように死んだ。五十六歳。想太郎の死で旧幕以来続いた心形刀流道場主として伊庭家は絶えた。

榎本武揚はこの後も命を長らえ、明治四十一年に七十二歳で死んだ。子爵――

五月十七日午前、伊庭さんの前に榎本総裁が葉を入れた梅を持つてやつてきました。

「伊庭君、本当によくやつてくれた。君の奮迅がどれほど私たちを勇気づけたことが。ありがとう」

総裁は深々と頭を下げました。伊庭さんは苦しうに息をしています。

「榎本さん、もう終わりですかい」

総裁の言葉をきくやゆつくりとまぶたを開きました。

「戦う力も尽きてしまったようだ。君はもうこんな苦しみむことはない。この葉を飲んで楽になつてくれ」

「それは毒ですね」

伊庭さんがいったとき、私は驚きました。同時にやはり強引にでも伊庭さんを湯の川に連れていくべきだった、と後悔しました。湯の川に伊庭さんを連れていっても、その体は数日も長らえることはなかったことでしょう。しかし、

このような絶望の淵から伊庭さんを送ることはなかったのです。私は目頭に熱い物が湧き出てくるのを押さえることができませんでした。

後に知ったことですが、総裁が用意した薬はモルヒネでした。モルヒネは鎮痛作用があるので、箱館病院で外科治療のときに用いられていました。○・ニグラム以上飲み込めば大人でも数時間で死ぬという劇薬です。

私は伊庭さんを抱きかかえながらゆっくりと病体を起こしました。私の頬に涙が幾筋も流れ、伊庭さんの服を濡らしました。

「田村君、なにも泣くことはないのさ。人間は誰もがこうなるんだ」

私は伊庭さんの体にしがみついて子供のよう泣きじゃくりたかった。でも、それはできませんでした。

「伊庭君、我々もすぐ後から行く。貴公は一足先に行つて

くれ」

総裁はそういつて腕の薬を勧めました。五稜郭はこの翌日の十八日に開城。自刃した者は誰もいませんでした。

伊庭さんは右手に腕を受け取ると、しばらく眺めて、ため息をひとつ吐きました。

「京や大坂ではたくさん旨いものを喰つたり飲んだりしたなあ。最後の贅沢はこれさ」

そういつて笑いました。愛嬌のある澄んだ瞳が私の網膜に光をさすように拡がりました。そして、ゆっくりと腕に口を近づけ、きれいに飲み干しました。

私は体を横たえてあげました。伊庭さんは眠るように目を閉じました。三十分過ても一時間になっても、その両眼は二度と開くことはありませんでした。外では砲弾の落ちる音が激しく響いていましたが、伊庭さんの人生は静かに終えた二十六年でした。

(了)

鳥語 五十四号の合評会を

二〇〇七年六月中旬までに開催の予定です。
場所とくわしい日時は、後日連絡します。



鳥語社